

令和6年度 体育科 研究のまとめ

栗原 良典・梅本 尚武・植田 一矢

1 体育科本来の魅力に迫るための教師の資質能力について

(1) 体育科が考える「教師の資質能力」の具体

体育科で学習する運動の多くは非日常的な動きを特徴とする。さらに、学習者は運動経験や身体的条件が異なり、運動に対する意欲についても差異がある状態から学習が始まる。教師はそのような学習者の「多様性」を前提としながら、どの学習者も運動の楽しさを感じながら課題を追求したいという「主体性」をもてるよう、かつ多様な学習者が「共に学ぶ」ことを有効に機能させる「協働性」を狙いながら、「体育科本来の魅力に迫る授業」を作り上げていくことが大切だと考えてきた。それらを踏まえ、体育科本来の魅力を『『こう動きたい』という自発的な運動衝動に突き動かされ、自らの身体や感覚と向き合いながら仲間とともに身体運動の課題を追求し、新たな諸能力を獲得すること』にあると定義した。

体育科本来の魅力に迫るための教師の資質能力の内容を、これまでの授業実践を基に示す。

資質能力	体育科が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	・学習者の実態を多面的（興味・関心等の情意的側面、身体能力・運動経験・既習の有無等の運動的側面、わざへの知的な理解・思考力等の認識的側面、他者との関わり方等の社会的側面）に把握する力 ・運動教材のもつ本質的意義を捉え、学習者の主体的条件や指導の時間的・物理的条件（教具の有無、場の広さ等）に応じて、発達適合的に作りかえ具体化する力 ・学習内容の抽出・選択（何を教えるのか）、教材・教具の構成（何で教えるのか）、学習の展開に関する検討（単元計画、発問、学習形態の選択等、どのように教えるのか）を行う力
授業実践力	・端的で的確なマネジメントを行うとともに、学びを深めるための課題発見・探求の機会を保障する力 ・活動の様子から学習者の実態（情意的側面、運動的側面、認識的側面、社会的側面）を把握し、それぞれの状況に応じて学びを深める支援を行う力 ・課題を焦点化したり気づきを促したりする発問 ・技能の向上に寄与する肯定的・矯正的フィードバック ・学び方（課題への取り組み方や他者との関わり方等）への肯定的な動機付けや賞賛 ・学習者の成長や変化を捉え、学習者自身の自覚へと繋げる声かけ
授業分析・評価力	・学習者に各時間で身につけさせたい学習成果を多面的・多角的に見取る力 ・教師行動の内容や割合を学習者の姿と結び付けながら省察し、改善していく力

(2) 体育科の特性に応じた見取りの方法について

①知識・技能

- ・知識テストの単元前後の統計分析

- ・毎時間の自己評価（学習指導要領原文に基づく評価基準）
- ・実技テスト（V T R録画の分析）の単元前後の統計分析

②思考力・判断力・表現力等

- ・毎時間の自己評価・自由記述（学習指導要領原文に基づく評価基準）
- ・授業中の児童・生徒の会話や活動記録の分析
- ・パフォーマンス課題による評価

③学びに向かう力・人間性等

- ・運動への愛好度調査の単元前後の統計分析
- ・毎時間の自己評価・自由記述（学習指導要領原文に基づく評価基準）

④抽出児童・生徒に対する調査・分析

- ・単元前に実施する愛好度調査の結果が著しく低い児童・生徒を抽出対象児童・生徒とする。その児童・生徒の変化に着目し、今回の授業実践におけるデータを縦断的に蓄積し、その検証を行う。

⑤授業実践の映像記録分析

- ・児童の学習活動の様子と、それに繋がる教師行動の内容的分析（V T R録画の分析・検討）

（３）授業公開で見取った児童・生徒の姿の例

資質能力	児童・生徒の姿	手立て
授業構想力	・めあてとなる動き方のこつを共有しながら関わり合うとともに、動き方のイメージをもって運動に取り組む姿。 ・効率の良い動きを模索する姿。	・課題把握後に簡単な場で身に付けたい動きを体験し、段階的にゲームの様相を設定する。 ・兄弟チームでプレイ後の振り返りを行い、学習者が自身の動きを見直せるようにする。 ・グループで動きを見合う活動にしたことで思考を深められる場面を作る。
授業実践力	・動きの質的な変化や運動者の意図についての評価を、児童相互が見合い、伝え合い振り返り、思考を深めていく姿。 ・１人で走るだけでなく、グループの仲間とかかわりあいながら活動する姿。	・得点の成否でなく、プレイの内容に対するフィードバックを即時的に本人に行うとともに、周囲の観察者に問いかけ運動を観察する視点を育成する。 ・iPadの活用法として、グループに１台のみ使用を認めたので自然とかかわりあう関係性を作ることができた。
授業分析・評価力	・多様な運動能力の段階にある児童においても、それぞれに合った戦術を選びながらプレイするとともに、相互に認め合いながら運動に取り組む姿。 ・自分の動きだけでなく、仲間や手本などを参考にして運動を工夫する姿。	・目標は共有しながらも、場面や個人の実態それぞれに応じた学習課題があることを全体で確認するとともに、個に応じた声かけを行う。 ・結果への振り返りでなく、プレイの意図を理解し認めたり、次の改善に繋がる具体を考えたりしている児童の関わりを認め、全体で取り上げ共有する。

2 研究の成果と課題

成果	○逆向き設計論に基づき、児童・生徒のゴールの姿を意識しながら授業を構想することで、体育科本来の魅力に迫る授業づくりにつながった。 ○児童が学習課題に向けて、より良く取り組んでいくために発問を精選（研ぐ）する力や、運動場面で思考のつまずきに対し、絶好のタイミングで全体共有の時間を確保する力等が教師の資質能力として必要となることを明らかにすることができた。 ○プレイ中の児童・生徒への肯定的、矯正のフィードバックや学習者同士をつなぐための声掛けの重要性を再認識することができた。 ○児童・生徒とのやり取りの中で、その時間で身に付けた動きの振り返りと次時への共通課題の共有を行う教師の資質能力の必要性を明らかにできた。 ○教師が目指すべき児童・生徒の資質・能力に向かって、重要となる言語を通した動きの理解にこだわりをもち、共有することができた。
課題	●それぞれの教師の資質能力に関して、様々な運動領域に広げてより深く研究していく必要があると考える。 ●「個別最適な学び」「協働的な学び」を行うことで、保健体育科の魅力にどこまで迫ることができるのかを明らかにしていきたい。 ●児童・生徒が単元を超えた汎用性のある言語を通して、動きの理解や獲得することができるよう、共有し価値づける教師の資質能力を高めていきたい。 ●児童生徒が体育科本来の魅力に迫ることができたゴールの姿を9年間の発達段階に応じて示すことが必要だと考える。